

多煙えに封
先白龍馬と
此下戦々ん
依り英米
財界の普選
也(報道せら
んは確かに
喜人の法螺袋
一部と成り
しと感謝す
尚如斯一般
報告と共に
又その目的
復々ば巨が
録筆の為
とうなるか
戦後精神
需要がどう
成るかと新

戦後精神の
需要がどう
成るかとか斯
うなるとか言ふ
特な報告を
もつてはらん
るしと云ふ
即ち一般的
報告も斯う
は要には相違
なキも此店の
取扱に保るも
の乃を日本の
高名に關係
ある研鑽
米、豆、石炭
船、汽船、萬
から等の部
高に下する
戦後
需要の考慮

材料あり就後に
要の要の要の要

算の報告あり

以上必要あり

と言ふべきなり

蓋し就中が

欲するに進む

進むに益あり

必要あり

三つしつとらぬ知

をいふ

小川先生の報告

終るまで又口に出

ン中然し所には斯

余格もよへん

と望むす

可なりす

今先生が聞か

んとする所を

左に平録せ

今も生かすか
んとすもは也
左に平録せよ
今日船の巻
今更時代は
後まゝに
すゝめよとせば
凡そ何の途
況すなき或
戦後進歩
口如何に成行
べき乎
砂糖の巻況は
戦後如何に
成行べき乎
戦後如何に
而も要は
状態如何
其の也米
豆油

其の也米

豆油之集油

樟腦 薄荷 荷

銅 錫 亜鉛

鉛 等之乾き

現存之状況及

戦後に於ける

需要供給の概

況の見込如

何等の

又是米に於て

鉄の供給は

戦後の如何に

拘らざるに

得らざるか

鉄炭に於ける

需要供給の

見込如何

方銀の戦後

見込の

方銀の残高

の赤と合算

と何れも差と

生じたらや又

残高方銀の

見込如何

造船費用は

新前と今よりと

又何程の差

ありや新後

如何に成行く

べき乎

莫中に行ける

新前と今頃

と比較せる

物価表も是

られたる但し

措教に依る

われたし但し
措敷に依る
もりしては

黙自中

り各種高
のす低表を

見えて今り

平らふ心付か

あり

争端の材

料を得人と

するにあは

とす

善玉如何に

宿せりと跳子

今もの如き大戦

也永くわりの時

往る不換紙

幣と登り

にまらん是

万人の

にまらんは
五人の朝元

恐ろしく地獄

にほくほくと

せらはんをよ

おひさす

秋多子のおめ

英皇のあま

地方的に成つ

弘米に人を

派遣するの

要 なまきや

今後白米は

米と100%の輸出

盛大にやらん

欲す の

例に依り

きは米は情是

すんき高をん

方 たこと

すんき高をん

なしたるも豆は

甚だ不えん

何りー

大に協力せ

らえへ

望まむ 豆なる

豆油の高をん

当地の小寺

故る優勢

なりー豆油の

如き鈴木高

の端者ら多数

の場合にて一

回一二万箱

運来おるは十軒

の場合口豆油の

揚船積高を

もたす

珍らあらざる

も以て甚だ

もねた
珍らわらざる
も以て甚ん

善に初まに

堪らず成らざる

つぎり来た下

かみす故新

多難の積法

たるものやい

果して並る時

何等浦山駁

るなりし

雖も若し然ら

ばるけし高人

のた軼居す

なるか以て

一片の情調を

とらえざるも

又現をの取引

差りていふ流

はく当如人

逐して善の

如く始効ある

運りて音の

如く始動也

おらち(管ん)

是れ又特別の

性質と云はれ

るや依りて

当方その鋼

亜鉛等の製

成りて其や

開如しなるに

是れ好経朱

即ち鋼の支那

の古銀其の地

古銀類を方

解亜鉛と銅を

得るを其の

銀はにこや

より鉄石を取

是と製煉す

其れ其の

計りて其の

花の...
...
...

計...
...

...
...

知識...
...

...
...

船...
...

丸...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

の破降は口ヤ

法文にて好

月後より

送すもの

先之地より

且其の地より

大西得へ

計西一個

十八円あり

高ければ

ニターリ

其の他此程の

字書あり

その中より

のほ佳文も取

るもの

面白か

是れ玉に

派可る

あらんか

所以

あらんかたは
所以也

今も古もあ

るはけい画い

凡一場点の

成信も進出

つてをうはま

高人として此の

大乱の顛末は

まがらふしむ

界の商業の

うにせしむ

大光宗とせむ

う得て即ち致乱

者遷り利用

大備とてあ

三井とてあ

う在倒るる年然

うたれえ縁の事ト

云下つていふ事

是は米商法令

質の理在下る所

天下の事は三つに分かると言ふ
是は其の末の法也
質理を推して其の
也は生を其の初め
生命のついでに
早に縮小して其の
更に縮小して其の
了るが要は成
功如くは其の
日と夜とを其の
想ふに他已

自聖者一カをせん
と雖も小全程
御大居る所は
自任し居る所
曰トシテ諸君は
協力し切出す
小生が経久自覚
於て士勤奮的
此書より遠くは
日々下海と欲
於けしと車
御上何れは
帝皇の長慶氏

於て古蹟の
此等より遠くは
日下海と云
於ては車
河上竹が跡
帝皇老彦氏
一筆に在り
之は十月二
持也
十月一日

後二日也

小川頭

高野

小丹

小川頭